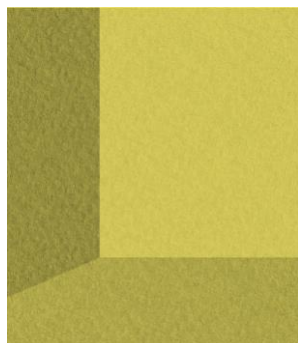


プラザ・おへやライブ
〜エマーソン北村トーク&ライブ〜 Vol.1



来場者特典冊子

目次

エマーソン北村より	02
ポップミュージックのルーツは世界中に！	04
エマーソン北村のおすすめ作品8選	08
自分のおへやに帰ったら聴いてみよう&見てみよう	10
エマーソン北村の演奏のなりたち	12

エマーソン北村より

こんにちは。本日は「おへやライブvol.1」にご参加いただき、ありがとうございます。

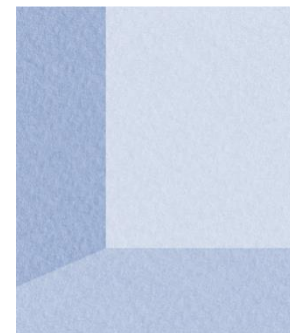
今日のイベントは、前半がトーク、後半はライブと、2部構成になっています。前半のトークでは、大きく2つのテーマについてお話ししようと思っています。

ひとつめは「ポップミュージックのルーツは世界中に！」です。私達が普段耳にするのは日本や欧米で作られた音楽が多いと思いますが、世界で楽しまれている音楽はそれだけではないこと、また、ひとつの国で生まれたように思われる音楽も、実はたくさんの音楽が国境を超えて伝わり、異なる文化と交流した結果として生まれていることについてお話しします。

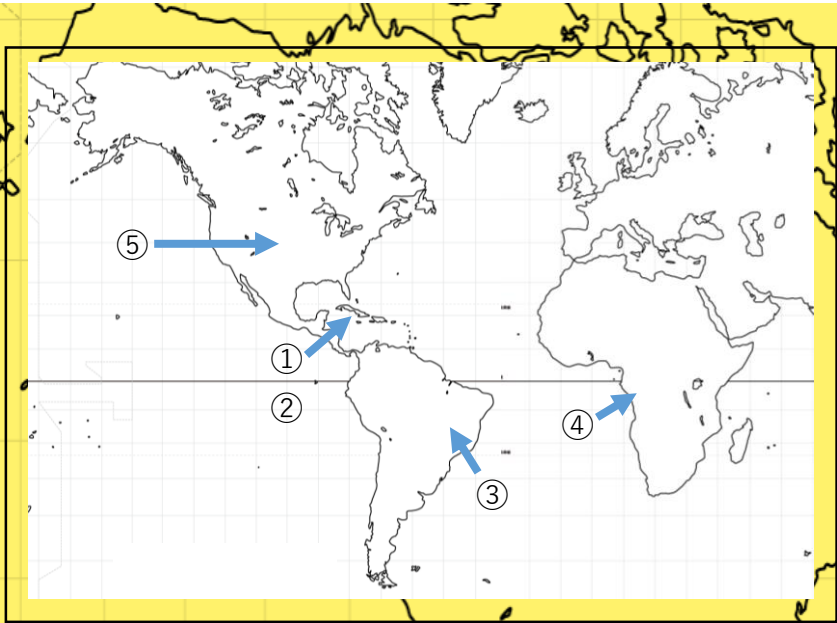
ふたつめは、僕自身の音楽スタイルについてです。

「音数（おとかず）の少ない、シンプルな」と言われることの多い「エマソロ」ですが、僕自身はレゲエというジャマイカの音楽を筆頭に、非欧米のポップミュージックに大きな影響を受けてきました。このことが実際の曲作りや演奏にどう反映しているのか、音を出しながら簡単にお話しします。トーク中はテーマに沿った質問も、「関係ないけどこの機会にエマーソン北村に聞いてみたい」という質問も、大歓迎です！

エマーソン北村



ポップミュージックのルーツは世界中に！



①ジャマイカ

もともと世界有数のポピュラー音楽を生んだ島々に囲まれている上に、第二次世界大戦後にはブルースやジャズなどUSAの流行音楽もたくさん伝わり、屋外で大音響のレコードを楽しむ独自の「サウンドシステム」文化を背景としてスカ・ロックステディ・レゲエといった音楽が生まれた。特にレゲエは1970年代に活躍したボブ・マーリーを筆頭として世界中のポップミュージックに大きな波を起こし、ひいてはエマーソン北村の演奏スタイルにまで影響を与えている。

②カリブ海の島々

キューバを筆頭に、南米と合わせて「ラテン」と総称されるこの地の音楽文化はヨーロッパ、アメリカ、アジア、さらにはアフリカにまで影響を与え、世界中のポピュラーミュージックの基礎とも言える役割を果たしてきた。その鍵はリズムにあり、「付点8分・付点8分・8分」で始まる「クラベ」のリズムがいかにポピュラーミュージックを「ポピュラー」なものにしているのか、今回のトークでは13ページの「グリッド譜面」を使いながらお話ししたいと思います。

③ブラジルと南米の国々

アフリカから奴隷として連れて来られた人々の文化とヨーロッパの文化が混ざり、都市の繁栄と共に生まれた音楽・サンバ。1960年代のボサノヴァやトロピカリズムなど、欧米で音楽の新しいトレンドが生まれるたびに、対する「ブラジルからの回答」を打ち出してきた歴史も持つ。またアルゼンチンで生まれたタンゴは、史上最初のポピュラー音楽と言われている。現代の南米を席巻している音楽はロックとスカとレゲエだが、そこに込められた「熱さ」とミュージシャンの層の厚さ・スキルの高さは、歴史のたまもの。

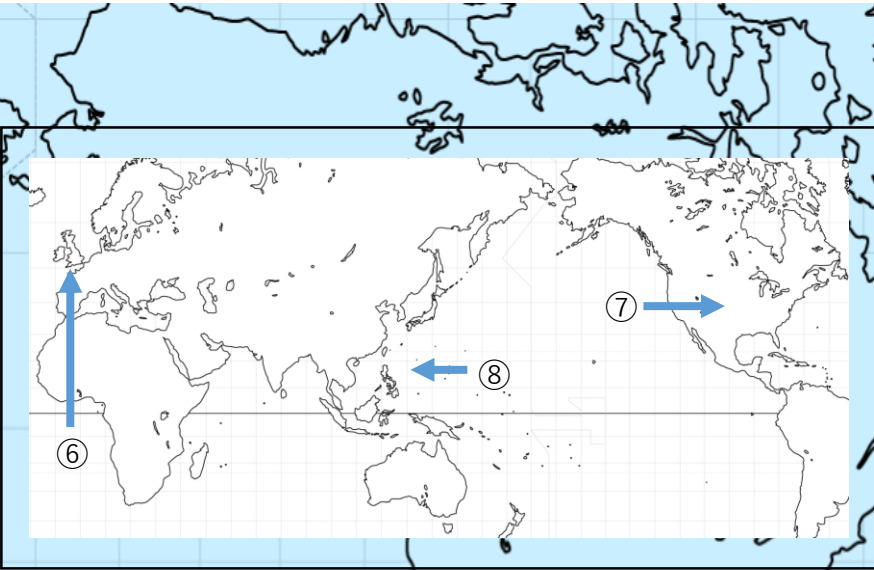
④コンゴとアフリカの国々

フランスとベルギーの植民地が川をはさんで向かい合っていた都市、ブラザヴィルと後のキンシャサ。アフリカ各国が独立した1950年代末のパワーを背景として生まれ、1980年代にはレゲエと共に世界のポップミュージックに多大な影響をおよぼしたアフロポップの「首都」のひとつだ。ギニア、セネガル、ナイジェリアなど西アフリカの国々はすべて音楽が豊かなところで、僕がケニアに行って感じたことから言えば、アフリカ各国同士の音楽は、僕たちが想像するよりもはるかに自由に交流しあっている。

⑤アメリカ合衆国（ジャズの誕生）

私達が親しんでいるジャズも、その誕生の歴史を明らかにしようとすると、かえって謎ばかりが増えるようだ。その場所はニューオリンズ周辺であると思われるが、どうやって生まれたかについてはかつて言われていたような「アフリカのリズム+ヨーロッパの和音」といった単純なものではないらしい。どの要素を、誰が、どんな風に生み出したか。それを音に即して追求すると、そもそも音楽の誕生を「民族」とか「血統」で説明する考え方自体が揺らいでくる。最近の音楽史研究はそんなところに来ているそうです。

ポップミュージックのルーツは世界中に！



⑥イギリス・ヨーロッパ

ビートルズを始めとして、アメリカ合衆国と共に20世紀のロック・ポップスを牽引してきたイギリス。
しかしここは、かつて植民地だった西インド諸島やアジアの人々によってカリブソやレゲエなど様々な音楽が持ち込まれ、発展した地でもある。1970年代末に起こったパンク・ムーブメントが一過性のものにならずに世界のポップミュージックを先導できたのは、それを担った若者たちが、地域に住むそれらの人々と手を結んだからだったと言える。
ライブハウス・フェス・自主流通といった「インディー」な音楽文化が根を張っているのは、もともと社会運動の盛んな歴史を持ち、その動きを理解する人があらゆる世代にいるからだ、現地に行くたびに強く感じる。それはフランス・ドイツなども同様で、ヨーロッパの各国では街ごとに、古くから住む人と移り住んできた人の交流による音楽が生まれ、イベントが行われ、楽しまれている。

⑦アメリカ合衆国（ヒップホップの誕生）

私達が「ポピュラーミュージック」という場合、それは欧米特にアメリカ合衆国のものだと思っている。
しかしよく聴いてみると、音のひとつひとつには歴史があり、それは移民としてこの国にやってきた世界中の人々（と先住民の人々）の多様な文化の交流が生み出したものだということを感じることができる。例えばヒップホップひとつをとっても、アフリカ系の人々だけでなくレゲエやプエルトリコの音楽からも大きく影響を受けて生まれ、さらに今それを担っている人にはアジア系も増えている。
本当に興味のつきないことです。

⑧アジア

インドネシア、タイ、中国、台湾、韓国.....音楽大国のひしめくアジア。
それぞれに伝統的な音楽がありながら、ジャズやロックといったUSAの音楽が大量に流入し、それを模倣し、次第に独自のポップスに消化してゆく、という過程は多くの国で共通しており、日本のジャズやロックの歴史も例外ではない。あまり知られていないが、例えばフィリピンは多くの優れたジャズ演奏家を生んでおり、昭和戦前には日本のジャズマンの「先生」となった人もいたそう。
ひとつの国だけで面白い音楽を作ることは、ありえないくらい難しいことなのだ。

【レゲエもアフロポップも実は『都会の音楽』??】

みなさんはレゲエやアフリカのポップスと聞くと、「ゆったりした」「素朴な」「都会風ではない」音楽を想像されるかもしれません。
しかし実際に音楽を聴いてみると、テンポ数は遅くても大きなうねり（グルーヴ）があり、その「スピード感」は相当なものであることに気づくでしょう。音楽の成り立ちを見ても、その街に例えば産業が発展するなどして人の大きな移動があり、それまでひとつと思われていた「伝統」に新しくやってきた文化が交わることで、新しい音楽が生まれている場合が多いのです。その意味ではこれらのポップミュージックもジャズなどと同様に「都会の音楽」ということができるでしょう。
そういえば川崎も、さまざまな文化が交わり、その豊かさを大切にしている街ですね！

1. Jackie Mittoo - In London (1967 Studio One)

ジャッキー・ミットーは、エマーソン北村の音楽スタイルに最も大きな影響を与えているジャマイカのキーボード奏者。アレンジャーとしても、レゲエを特徴づけるベースやリズムの多くを考え出したと言われています。このアルバムはオリジナルなレゲエ（ロックスステディ）はもちろん、当時流行したポップスの曲なども取り上げられています。オルガンの音が若々しい！

2. V.A. (コンピレーションアルバム) - London Is the Place for Me vol.2 (2005 Honest Jon's Records)

第二次大戦後、イギリスへ渡った西インド諸島の人々が録音した「イギリスのラテン・カリプソ」を集めた編集盤。「ルーツ」の音楽と移民先の都市で生きるための要素が混ざりあい（歌詞もそのひとつ）、踊れて心も満たされる曲が並んでいます。何集も制作されていてvol.8くらいまでありますが、北村の一番の好みはvol.2。

3. Caetano Veloso - Fina Estampa (1994 Philips)

カエターノ・ヴェローゾはブラジルの音楽界で現在も活躍している素晴らしいシンガー。1960年代末に音楽運動「トロピカリズム」を率いて歌詞世界の独特な曲を作ってきましたが、ここではポルトガル語ではなくあえてスペイン語による「ラテン」の名曲を歌ったこのアルバムを。オーソドックスな曲に斬新なアレンジをほどこず、バックミュージシャンの演奏も素晴らしい。

4. Le Grand Kallé: His Life, His Music - Joseph Kabasele (2013 Sterns Music)

僕はナイロビで買ってきたコンゴ音楽の歴史についての本を読んでいるんですが、このグラン・カレことジョセフ・カバセレはその最初に出てくる人です。1950年代末、アフリカ各国が独立する時代のエネルギーとキューバ音楽からの影響を受けて、後にキンシャサと呼ばれる街で新しい音楽が生まれる、その瞬間を捉えたアルバムです。

5. The Raincoats - The Raincoats (1979 Rough Trade)

うって変わって、イギリスのパンクと真ん中の時代に飛びます。レインコーツはともすれば「白人男性」中心になりがちだったパンク・ムーブメントの中で、アーティストックでフェミニズムな音楽を作った、むしろこちらにパンクそのものがあるような女性バンドでした。レゲエミュージシャンとの協力がすばらしい「The Slits」というバンドもオススメです。

6. Louis Jordan - 1939-1954 (1996 MCA)

アメリカの音楽から一枚選ぶとしたらこの、ジャズともブルースとも芸能ともつかない、ジャンルの境目にあるルイ・ジョーダンの音楽を。ロックからもヒップホップからも「元祖」と考えられているアーティストです。ラテンの要素もあって、若々しく覚えやすく、当時の最先端なのにお高くとまらない、素晴らしい音楽です。日本で編集されたアルバムです。

7. Ry Cooder - Jazz (1978 Warner)

古く、トレンドの中心にはない音楽にこそ、人と音楽の関わりの歴史を感じることができる。僕も教えられることの多いテーマに初めてロックの世界で取り組んだのが、このギタリスト、ライ・クーダーです。取り上げられている1920年代のジャズミュージシャンBix Beiderbeckeの音楽も、僕は大好きです。

8. Summer of Soul (2021 映画)

これは音楽作品ではありませんが、昨年公開された音楽映画として素晴らしいので紹介します。1969年ニューヨークのハーレムで行われた音楽フェスティバルの記録で、The Staple SingersやSly & The Family Stoneなどゴスペル・ブルース・ソウル・ジャズ・ラテンの素晴らしい演奏が次々と行われます。公園のステージに集まったお客さん達の姿も美しい。

自分のおへやに帰ったら聴いてみよう & 見てみよう

ここでは、インターネットですぐにアクセスできる、エマーソン北村がアップしているコンテンツから最新のものを紹介します。



■エマーソン北村ウェブサイト

エマーソン北村の活動が、ライブスケジュール/ 参加作品/ 自身のレーベルからリリースされているソロ作品などに分かれて紹介されています。アフリカ旅行記などの文章も載っています。文章は今後、専用のサイト「エマーソン北村文章サイト」で発表してゆく予定です。

Home > Solo/Label

■YouTube

「Emerson Kitamura Plays シリーズ」

エマーソン北村のYouTubeチャンネルで不定期に続けている演奏動画シリーズ。完成した楽曲の発表というよりも、自宅でいろいろなアイデアを試している瞬間をとらえてアップすることを目標にしています。タイトルは「オルガン」となっていますが必ずしもそれだけでなく、時にはアナログシンセの使い方やテーブルプープの作り方といった、マニアックなテーマを扱うこともあります。



船窓 / おろかな指



エマーソン北村



■Bandcamp

主にインディーなアーティストの作品発表の場として定評のあるサイト、Bandcamp 内のエマーソン北村ページには、以下のようなコンテンツがあります。

「Home Recordings 2020/03 ~」

コロナ禍によってライブがキャンセルになり、家にいる時間が増え始めたころに、自分の演奏の基本といえる楽曲に立ち返ってそれらをシンプルにカバーしてみたものです。どれも一曲3時間くらいで制作しています。コロナ禍にリスナーを元気づける意図もあり、料金は¥0 (かそれ以上) に設定しています。

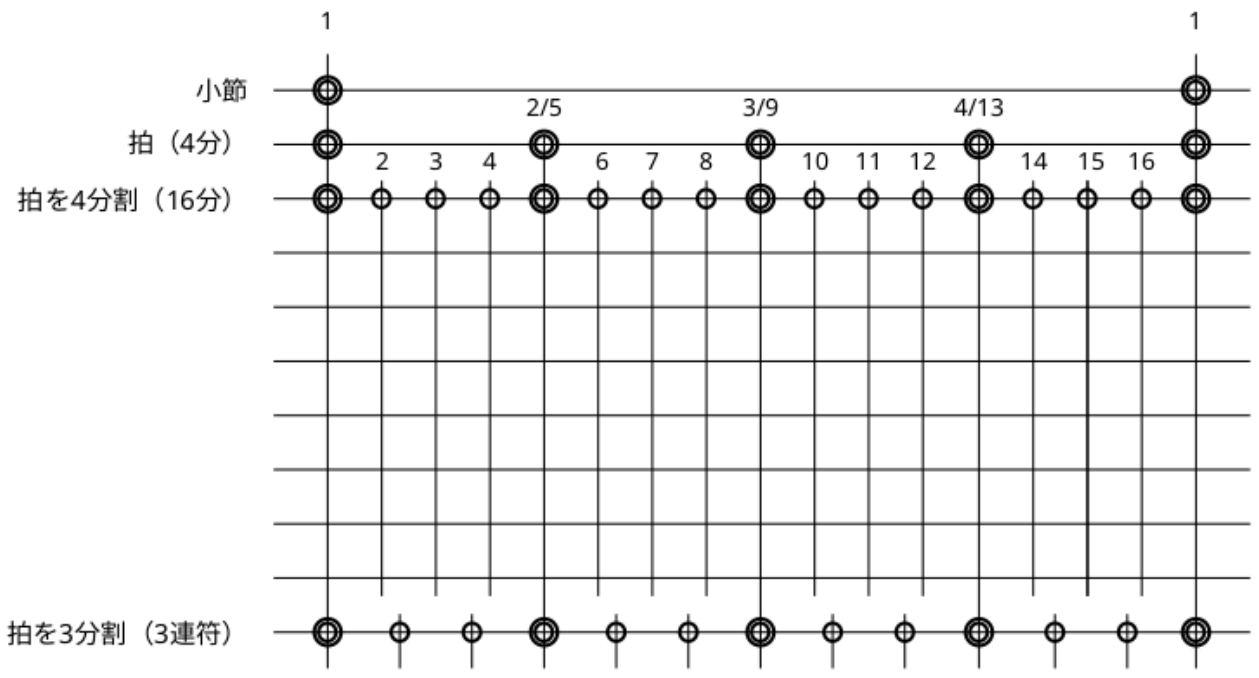
「船窓 / おろかな指」

2022年6月に発表された、ソロとしては久しぶりの新曲2曲をここで試聴・購入することができます！
夢のようなインスト (器楽) 曲「船窓」と、自身で歌詞も書きシンガーのmmm (ミーマイモ) との二人で歌った「おろかな指」からなる、最新音源です。ダウンロードコードが記されたカードでの販売も行っています。

Bandcamp にはもう一つ、シンガーのmmmとのコラボ作品「CHASING GIANTS」のページもあります。これを携えてヨーロッパツアーを行なった作品です。

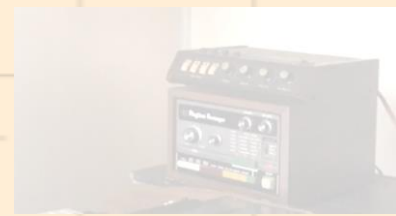
■本日の楽器とバンドの各パートの関係

キーボード奏者のライブというのは正直なところ、お客さん側から見ると「何をやっているのか分かりづらい」ことが多いのです.....そこで今日のライブの、僕側から見た楽器セッティングを写真にしてみました。
鍵盤A/鍵盤B/ドラムボックスがそれぞれ、バンドにおけるメロディ・コード/ベース/ドラムに対応していると思っていただいても結構です。ライブをより楽しむ助けになればと思います。



■拍とリズムについて

音楽を聴く際に感じる最小のまとまりを小節ということは、ご存知だと思います。また小節の中で、「いち、に、さん.....」と数えることのできる、リズムの「ポイント」を拍と呼ぶこともご理解いただけたと思います。
横の「グリッド譜面」では例として、4拍子の曲の1小節分を表してみました。しかし我々演奏者にとっては、1拍の中をさらにいくつか分割し、その「グリッド」中のどのタイミングで音が鳴らされているかを把握することが重要になってきます。分割のしかたや、どのポイントに「キモ」となる音を置くかによって、音楽のスタイルの特徴が生まれてきます。トークではこのグリッドを使いながら、音楽を特徴づける「リズム」の大切さについて話をしたいと思います。



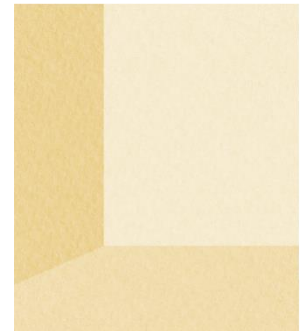
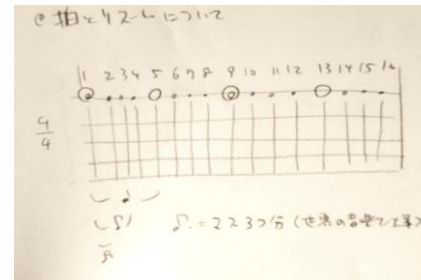
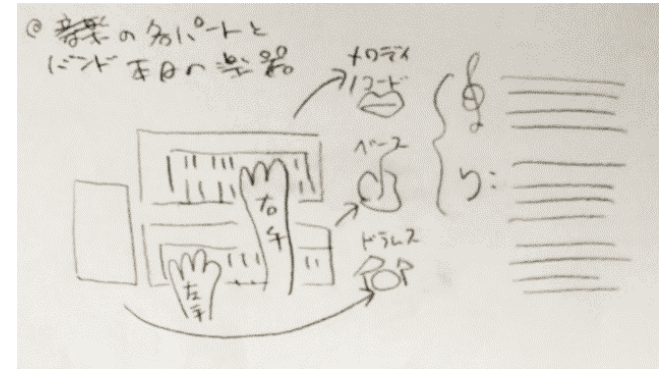


エマーソン北村

エマーソン北村は、1980年代末から現在まで、常に音楽シーンの真中でその動きに携わってきたミュージシャン。

キーボード奏者として忌野清志郎&THE 2・3's、EGO-WRAPPIN'、キセルなど多くの个性的なバンド・シンガーと共演し、「エマソロ」と呼ばれるアーティスト活動では、国内外で注目される作品を自身のレーベルからリリースしている。お店の片隅からフェスティバルにいたる日本中のあらゆる場所でライブを行っている他、2000年代前半から韓国、2019年にはアフリカ・ケニア、2009年と2019年にはヨーロッパ各国で演奏を行った。

音楽に対する広く深い理解と常にライブの「現場」に立ち返る姿勢が、その曲と演奏に反映されている。



「プラザ・おへやライブVol.1～エマーソン北村トーク&ライブ～」
来場者特典冊子

2022年7月31日発行

制作・編集 川崎市民プラザ文化事業部

テキスト・写真 エマーソン北村

「船窓/おろかな指」イラスト&アートワーク 惣田紗希

アーティスト写真 伊藤菜々子、柴田恵理

印刷・製本 川崎市民プラザ文化事業部

Not For Sale